

今、桜前線は東北地方を北上中でしょうか。毎年4月23日の「子ども読書の日」から5月12日まで、「こどもの読書週間」です。

現在会員登録数 2,610 人さま。次号は5月22日発行の予定です／

◆◆◆ 目次 ◆◆◆

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》読書活動ボランティアのためのワンポイント 92

《4》行って来ました！

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

■ 【1】お知らせ ■

● 国際講演会の報告集を販売しています

昨年7月に開催しました国際講演会「タンザニアの絵本作家 ジョン・キラカ 自作を語るーバオバブの木の下でー」（主催：当財団、大阪府立中央図書館）の報告集。キラカさんの講演と子ども向けワークショップを記録しています。発行：当財団 2018年2月 A4判36頁 1200円＋税

● 講演会「ドイツの子どもの本の魅力」の報告集を販売しています

昨年11月に開催しました講演会「ドイツの子どもの本の魅力ーブッシュ、エンデから現在までー」（主催：当財団）の報告集。上田真而子さんの講演「ドイツの子どもの本の魅力ー翻訳を通して出会った作家・作品たちー」と、酒寄進一さんの講演「ドイツの子どもの本ー過去から未来へー」を記録しています。発行：当財団 2018年3月 A4判36頁 800円＋税

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いします。

お申し込み、詳細は → <http://www.iiclo.or.jp/donation.html>

● 当財団公式 Twitter → https://twitter.com/IICLO_News

■ 【2】コラム ■

《1》この本読んだ? Yasuko's & Masayo's Talk

『キジムナー kids』 上原正三/著 現代書館 2017年6月

対象年齢：中学生以上

あらすじ：太平洋戦争が終り疎開先から沖縄に帰ってきた小学5年生のハナーは、祖父がハブをとって生計をたてているハブジロー、おならをするのが得意なポーポー、両親を亡くしヤギ小屋で寝泊りし、ヤギ語しか話さないベグア、アメリカ軍の物資をこっそり持って来てくれるサンデーとガジュマルの木に秘密基地を作り、遊びながらも食べ物を手に入れようと必死になる日常を描く。

M：エネルギーな子どもたちに圧倒されました。そして、少年たちの冒険を描いた群像劇という点でちょっと『スタンド・バイ・ミー』（スティーヴン・キング著 山田順子訳 新潮社）を思い出しました。

Y：食べ物を手に入れるためには、米兵や配給所から食べ物をくすねることも、お葬式で沖縄の妖精とも妖怪とも言われるキジムナーの恰好をして踊ることも何でもやります。その必死さとそれで窮地に陥る様子に思わず笑ってしまいました。

M：とはいえ、子どもたちの背後には「死」の臭いが漂っています。ポーポーが片腕で逆立ちをするのは、家族とともに爆弾を受けたためですし、ヤギ語しか話さないベグアは、集団自決の現場を目の当たりにしたという過去があります。

Y：このような子どもたちの背景が少しずつ明かされていく描かれ方もおもしろかったです。

M：その語り手が疎開先から帰ってきた怖がりのハナー。ハナー自身は沖縄戦を体験していないため、読者の視点に近いと言えます。

「あとがき」の「人々には己を見失わない共通の連帯感と平等意識があった」という点も強く印象に残りました。敗戦によって大人も確かな価値観が持てず、何もかも失った中で生まれた「大人と子どもの平等」はユートピア的である一方、そこにはたくさんの死が隣り合わせにある。そのコントラストが鮮やかだと思いました。

Y：失ったものは人の命だけではなく、代々引き継がれてきた着物や楽器などモノも破壊されています。そんな中で、方言やキジムナーの物語は受け継がれていく。方言の多用と作品の背後にキジムナーの物語があるところからそんなメッセージを受け取りました。

M：そういう意味では、歌や踊りや食べ物の細かい描写も文化が受け継がれている象徴として描かれています。子どもたちがお葬式で踊り、参列者たちも踊りだす場面はこの作品のクライマックスの一つだと思いました。

Y：骨を拾い続けるフリムン軍曹や孤児院を作る夢を持つハルちゃんなど、他にも数多くの個性的な人物が登場し、戦争を語った新しい「YA小説」だと思いました。

* 今回のゲストは愛知淑徳大学教授の酒井晶代（M）さんです。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第32回「銀河鉄道の夜」（その3）

ジョバンニとしての「私」

前々回の「銀河鉄道の夜」(その1)(当メルマガ NO. 90)を「牛乳を手に入れるまで」という見出しで書きました。その内容は、天沢退二郎の論文「なぜ〈カムパネルラの死に逢ふ〉か 銀河鉄道の彼方・序説」(1979年)の「《乳》のモチーフ」の節の指摘と重なります。そこには、「この童話の荒筋は、〈貧しい少年ジョバンニが母のところに配達されなかった牛乳を牛乳屋へとりに行って、それを持って家へむかうまでの話〉という枠のなかに要約できる。」と書かれています。「イーハトヴ周遊」は先行研究にいていねいに言及できるようなスタイルと分量をもっていませんが、これは、必ずことわるべきことでした。おわび申し上げます。

「銀河鉄道の夜」の第一章「午後の授業」冒頭の先生のことば「ではみなさんは、そういうふうには川だと云われたり、……」は、テキストの語り手なしの場面のなかの誰かの視点で語られています。つぎの「先生は、黒板に吊した大きな黒い星座の図の、……」「カムパネルラが手をあげました。」「それから四五人手をあげました。」も、語り手か場面のなかの誰かの視点。そのつぎの「ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。」は、語り手なしのジョバンニの視点から叙述されています。そのまたつぎの「たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、……」は、ジョバンニの視点から。この文を読んだとき、読者は、ジョバンニの視点から作品世界が描かれていくのだろうと予測するというのは、野浪正隆「限定視点を生成する叙述」(2001年)の分析です。

たしかに、ここで、ジョバンニの視点で物語を語っていくという設定ができ、読者のほうにも、ジョバンニの立場になって物語を読んでいくという態度がセットされます。教室のなかのジョバンニのぼんやりも孤独も、読者は、ジョバンニになった「私」のこととして読むでしょう。やがて、「私」は、丘の頂のつめたい草に体をなげ、「銀河ステーション、銀河ステーション」という声を聞くのです。カムパネルラとの旅も別れも、「私」のこととして読まざるをえない。これが「銀河鉄道の夜」の魅力です。(馬車別当)
(本文の引用は、新潮文庫版『新編 銀河鉄道の夜』によりました。)

《3》 読書活動ボランティアのためのワンポイント 92

その11 さまざまなご質問にお答えします(10) おはなし会について

質問：イベントで大型本を読みます。本を二人で持つので、地の文とセリフに分けて二人で読もうと思っています。子どもが多く、その方が伝わりやすいと思うのですが、どうでしょうか？

大型本をどういうメディアだと考えるかによって決まると思います。本来、通常サイズの絵本は、自分で読む、2、3人で読む大きさとして作られています。その中で、集団でも楽しめる絵本を選び、おはなし会が行われています。これは、家庭で絵本を読んでもらう経験の少ない子どももいる中で、絵本の楽しみ方を伝えるという目的があります。また、集団で一つの芸

術を楽しむことができるという点もあります。

集団で通常サイズの絵本を読む場合、通常一人で読むのは、1冊の絵本にある一つの物語を読み手が解釈し、絵と読み手の声によって聞き手に届けるという意図があります。ページのめくり方、間の取り方、登場人物の声など、すべてが読み手の解釈によって決まります。大型絵本でもこの点を大切にすれば、つまり、通常サイズの絵本を大きくしたものだと考えるなら、一人で読むことになります。

一方、大型絵本は、大型になったことで、劇場的な効果が生まれます。一人で持って読むのは難しいので、絵本を置く台のような舞台を使うことになります。また、絵が大きいので、その絵を伝える読み方は、通常サイズよりも迫力が必要です。そこで、大型絵本を通常サイズの絵本とは異なるメディアとして、演劇的に楽しんでもらおうと考えると、複数で読むという考え方が出てきます。

この場合、単純に二人で読むということではなく、二人の間で作品の解釈を統一し、ページのめくりを練習して、演劇的に一つの物語世界を届けることが必要です。できれば、誰かに見てもらって練習するのがいいと思います。

絵本の読み方はこうでなければならないということではなく、なぜ、このような読み方をするのかを考えることが必要です。通常サイズの絵本への誘いのために大型絵本を読むのか、大型絵本というメディアの楽しさを伝えようとするのかによって読み方が決まると思います。

* 今回の質問は、読者の方からいただきました。ありがとうございます。
次号は「その11 さまざまなご質問にお答えします(11)」の予定です。
ぜひ、ご質問やご意見をお待ちしております。(Y)

《4》 行って来ました！

明石市立文化博物館で5月20日まで開催されている「誕生50周年記念 リカちゃん展」に行ってきました。

1967年に誕生した着せ替え人形の「リカちゃん」は、3回のモデルチェンジをしながら50年たった現在も親しまれています。この展覧会では、リカちゃんやファミリーの人形、リカちゃんハウスや小物、ブックレットなど500点以上が展示されています。

リカちゃんは、「本当に日本の女の子の喜ぶ人形を作りたい」という考えから、女の子の夢とあこがれの少女マンガの世界にたどりつき、マンガ家 牧美也子さん監修の元、生み出されました。当時の手書きの開発ノートからは、ハウスの開き方や頭の形やドレスなど試行錯誤しているのがわかり、興味がわきます。

初代から現在の4代目までの間にも、顔だけでなく、手足や関節の動き、髪の毛の生え方、体型など、細かく改良されていて、変遷がわかるように15体並べ

いもので、たいそう不自由した。再発に備えて、英国紳士風ステッキか、チャップリンの杖か、はたまた座頭市の仕込み杖…思案の末、トレッキング用のストックにした。軽くて長さ調節が簡単、先端のキャップを換えれば屋内外の使い分けもできる。幸い出番がないが、春なので、もう1本そろえて「ノルディックウォーキング」にトライしますか…。(A)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/m1_magazine/index.html パソコンからどうぞ

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp
